

高校における短時間で継続的に行う「人間関係づくりプログラム」の効果的な活用に関する調査研究（1年次／2年）

大分県教育センター教育相談部
指導主事 伊藤 由紀

I 研究の背景

「児童生徒の問題行動・不登校等生徒指導上の諸課題に関する調査」（文部科学省）によれば、いじめ・不登校の問題は未だ改善されず、大分県でも継続的な問題となっている。その背景には、家庭や地域社会の変化により、人間関係を作るスキルを身につける機会が減少していることがあると考えられる。大分県教育委員会でも、この問題の解決に向けて、令和3年度から全ての公立小・中学校、県立高校及び義務教育学校で、短時間で継続的に行う「人間関係づくりプログラム」（以下、短時間プログラム）の実施を進めている。

II 現状と課題

大分県教育委員会は、短時間プログラムの実施に向け、公立小・中学校 22 校に地域児童生徒支援コーディネーターの配置や県立高校 4 校で実践研究モデル校を指定して実施等、段階的に取組を進めてきた。さらに、令和3年度からは、全公立小・中・高校及び義務教育学校において短時間プログラムの実施が始まった。

県教育センター教育相談部では、平成 27・28 年度に、冊子「大分県版人間関係づくりプログラム（小学校・中学校・高校編）」を作成し、全公立小・中学校・高校へ配布した。また、令和元年度から、短時間プログラムの効果的な活用に関する研究を複数の公立小・中学校に協力を依頼して進め、令和3年度には県立高校 1 校も含めての研究も行ってきた。

昨年度の調査研究の結果、管理職のリーダーシップの下での組織的取組や年間を通しての継続的な取組等が、児童生徒の学校での居場所づくり・絆づくりに有効に働き、学校生活全般に良い影響を及ぼしていることがわかった。しかし、高校においては、QU 検査による生徒の変容は確認できたが、教職員の有効性の実感までには至らなかった。また、学校安全・安心支援課が行ったアンケート調査では、高校において、実施時間の確保や教職員の共通理解等の課題が挙げられており、組織的・継続的な取組が行われているとは言い難いことが指摘されている。

III 調査・研究の内容

1 調査研究の目的

高等学校において、短時間で継続的に行う「人間関係づくりプログラム」を組織的・継続的に取り組むことが、生徒の人間関係をつくる力を育成するために有効かを検証する。また、組織的・継続的に実施する上での効果的な取組や課題を明確にする。

2 研究協力校で短時間プログラムを実施

県内の県立高校 2 校で、表 1 に示す時間帯で短時間プログラムを実施した。令和4年4月～令和5年3月の間、県教育センターから担当指導主事が、各学校を1～2か月に1回程度訪問し、実施後に

内容や方法について、課題を把握し助言した。

表 1 研究協力校の学校規模と、短時間プログラムの実施時間帯

研究協力校	学校規模	実施時間帯
A校・1～3学年 (研究協力2年目)	各学年4学級 30～35名程度在籍	隔週火曜日 16:05～16:15
B校・1～3学年 ※3学年は1学期のみ実施 (研究協力1年目)	各学年4学級 20～30名程度在籍	1学期 : 毎週火曜日 8:25～8:35 2・3学期 : 毎週水曜日 15:05～15:20

3 研究協力校会議の実施

令和3年7月、10月、12月に、研究協力校2校の担当者等に加え、指導助言者として大分大学教育学部教授藤田敦氏、共同研究者として大分大学教職大学院准教授宮崎好治氏が出席し、各校の短時間プログラムの実施に伴う課題とその解決に向けた研究協議を行った。協議で明らかになったプログラムの有効活用の方法を共有し、各校の実践に生かした。

4 研究協力校での2回の「WEBQU」(A校)、「hyper-QU」(B校)の実施及び結果比較

短時間プログラムの実践効果を測定するため、A校は7月と11月にWEBQU、B校は「よりよい学校生活と友達づくりのためのアンケートhyper-QU」(以下、hyper-QU)を5月と11月実施し、その結果を比較した。両校とも1・2学年で2回実施しているため、分析対象も同様とした。

5 短時間プログラムを活用するにあたって実施前後の生徒と教師の意識変化に関するアンケート実施及び結果比較

短時間プログラム活用にあたっての生徒と教師の意識の変化を測定するため、プログラムの実施初期(8月下旬～9月上旬)と後期(12月中旬～1月上旬)に意識変化に関するアンケート調査を実施、その結果を比較した。なお、B校については、2学期まで短時間プログラムを実施した1・2学年を分析対象とすることにし、合わせて教職員も1・2学年担当教職員等を分析対象とした。

6 短時間プログラムの資料活用

2校の短時間プログラムに関する実践資料集を作成し、YELL(教職員研修申込みシステム)にアップロードし、随時活用できるよう整えた。

IV 調査・研究の結果

1 協力校における短時間の「人間関係づくりプログラム」の実施(別添資料1・2)

<両校共通>担当教員を中心に年間実施計画を作成した。4月当初に全教職員対象の校内研修(県教育センター出前研修利用)を行った。実施理由・目的などを理解した上で、短時間プログラムの数種類のエクササイズを体験し、一連の流れを確認した。全教職員共通理解の下、全学年でプログラムの実施を開始した。

<A校>昨年度とほぼ同様の方法で実施した。全クラスで、担任が主指導、副担任がサブで支援をするティームティーチング(以下、T・T)を行った。実施したエクササイズは、昨年度と同様の種類で固定し、細かい内容については担当分掌が協議し決定した。毎回、担当分掌主任がワンペーパーに

高校における短時間で継続的に行う「人間関係づくりプログラム」の効果的な活用に関する調査研究

まとめたプログラムの進め方やめあて、エクササイズ教材を Teams 上で教職員間共有することで、打合せと準備の時間を短縮した。エクササイズ教材については、生徒もタブレット端末を使用し、手元で見ることができるようにした。また、終了後のふりかえりを Teams 上で入力回答することで、即時で生徒の声を確認できるようにもした。実施予定日を月行事表に明記し、生徒や教職員だけでなく、保護者等の外部にも知らせるようにしていた。悪天候や新型コロナウイルス感染状況の影響で、延期等はあったが、ほぼ計画通りに実施した。

＜B校＞A校と同様に、全てのクラスで、可能な限り T、T を行った。実施したエクササイズは、担当教員が中心となり、生徒の実態に合わせて設定した。毎回、担当分掌主任がワンペーパーにまとめた3つのルール、エクササイズの流れ等を教職員と生徒へ配布、教職員へはデータとしても配信し、生徒の実態に合わせて電子黒板へ必要事項を投影したり、手元で確認したりできるようにした。終了後に生徒はふりかえりシートに記入し、担当分掌でまとめ、教職員へフィードバックした。計画では、毎週実施予定であったが、学校・学年行事等の日程調整で、月1～2回程度の実施となった。実施予定日に実施できない場合は、別日で実施することもあった。

2 研究協力校会議の実施

年3回の研究協力校会議で、各学校での取組報告、協議を行った。出席者からの質問や意見等から、取組の方法の良さや改善点等を見直し、日々の実践へつなげていった。助言者からは、「活動自体を生徒や教職員にとって負担感がないものにするために、いかにシンプルにしていくかが大切」や「社会生活が間近に迫っている高校生が、自分の思いを言語化する活動の重要性を大切にすべき」等、高校で活用する際の短時間プログラムの意義についての示唆を受けた。

3 「WEBQU」(A校)、「hyper-QU」(B校) 結果の比較

＜A校(表2)＞全学級において、2回目に良好なクラス状態である親和型(注 QU 学級集団タイプ)で維持もしくは好転した。学級生活満足群においては5学級が好転、数値が下降している学級を含めても全学級で高数値を示した。非承認群は5学級、侵害行為認知群は4学級、学級生活不満足群は2学級で好転した。全ての項目において、ほぼ全学級、高い水準での好転や維持を確認した。

表2 A校「WEBQU」結果(学級満足度尺度より)

	診断結果		学級生活満足群		非承認群		侵害行為認知群		学級生活不満足群	
	1回目	2回目	1回目	2回目	1回目	2回目	1回目	2回目	1回目	2回目
全国			40%		22%		15%		23%	
1年生										
A	親和型-安定-活用	親和型-安定-活用	68.6%	65.7%	20.0%	20.0%	2.9%	5.7%	8.6%	8.6%
B	親和型-安定-創造	親和型-安定-創造	85.7%	85.7%	10.7%	11.4%	3.6%	0.0%	0.0%	2.9%
C	親和型-安定-創造	親和型-安定-創造	81.0%	83.3%	14.3%	4.2%	0.0%	4.2%	4.8%	8.3%
D	親和型-安定-活用	親和型-安定-遂行	65.2%	56.5%	4.3%	13.0%	17.4%	21.7%	13.0%	8.7%
2年生										
A	親和型-安定-創造	親和型-安定-創造	80.6%	70.0%	9.7%	6.7%	3.2%	16.7%	6.5%	6.5%
B	かたさ型-固定-進行	親和型-安定-活用	45.0%	65.0%	35.0%	15.0%	20.0%	10.0%	0.0%	10.0%
C	親和型-安定-創造	親和型-安定-創造	79.2%	92.0%	4.2%	0.0%	4.2%	4.0%	12.5%	4.0%
D	かたさ型-固定-進行	親和型-安定-活用	56.5%	65.6%	13.0%	12.5%	21.7%	9.4%	8.7%	12.5%

* **ピンクのセル**は、2回目の検査で好転した状態である。

* **緑のセル**は、1・2回目の状態を維持している状態である。

* **青のセル**は、1・2回目では状態は変化した、良好な状態の範囲内である。

* 高校「WEBQU」の全国平均率は集計中のため、参考数値として「hyper-QU」の全国平均率を記載している。

大分県教育センター教育相談部

＜B校(表3)＞2回目に、2学級が良好なクラス状態である親和型へ好転、2学級が維持を示した。学級生活満足群においては3学級が好転した。また、8学級中6学級が全国平均よりも高い数値を示した。非承認群と侵害行為認知群は5学級、学級生活不満足群4学級で好転した。全学級で、いずれかの項目で好転を確認した。

表3 B校「hyper-QU」結果(学級満足度尺度より)

	診断結果		学級生活満足群		非承認群		侵害行為認知群		学級生活不満足群	
	1回目	2回目	1回目	2回目	1回目	2回目	1回目	2回目	1回目	2回目
全国			40%		22%		15%		23%	
1年生			51%	48%	15%	16%	15%	15%	20%	20%
A	拡散型	拡散型	27%	25%	13%	31%	33%	25%	27%	19%
B	ゆるみ型	不安定型	55%	48%	14%	14%	18%	14%	14%	29%
C	かたさ型	親和型	61%	67%	22%	10%	0%	14%	17%	10%
D	不安定型	不安定型	52%	48%	10%	19%	14%	10%	24%	24%
2年生			54%	56%	16%	11%	12%	16%	17%	17%
A	親和型	親和型	50%	65%	10%	5%	20%	15%	20%	15%
B	親和型	ゆるみ型	65%	58%	8%	0%	12%	19%	15%	23%
C	かたさ型	親和型	38%	38%	38%	33%	5%	19%	19%	10%
D	親和型	親和型	64%	64%	7%	7%	14%	7%	14%	21%

* **ピンクのセル**は、2回目の検査で好転した状態である。
* **緑のセル**は、1・2回目の状態が維持されている状態である。

4 生徒と教職員の意識変化のアンケート結果

両校ともに、実施初期、後期両方で回答が得られた回答者、(A校：生徒 294名・教職員 29名、B校：生徒 152名、教職員 20名)を分析対象とした。生徒と教職員両者に行った同質問7項目の4段階評価の数値について比較を行った。

表4 A校 生徒・教職員意識アンケート比較

質問項目	評価(4段階) ※点数が高いほど肯定的な意識を示している					
	実施初期			実施後期		
	生徒	教職員	差	生徒	教職員	差
① 友だちとの関係づくりにより影響や変化を感じた	3.3	3.3	0.0	3.3	3.4	0.1
② 先生と生徒との関係づくりにより影響や変化を感じた	2.6	2.7	0.1	2.6	2.9	0.3
③ クラス内での生徒の居場所づくりにより影響や変化を感じた	3.0	3.3	0.3	3.1	3.3	0.2
④ 生徒のコミュニケーション能力の向上により影響や変化を感じた	3.2	3.1	0.1	3.2	3.2	0.0
⑤ 生徒のソーシャルスキルの向上により影響や変化を感じた	3.3	3.1	0.2	3.3	3.2	0.1
⑥ 各教科等の授業でよい影響や変化を感じた	2.8	2.9	0.1	2.9	3.1	0.2
⑦ 授業以外の活動でよい影響や変化を感じた	3.0	3.0	0.0	2.9	3.1	0.2

赤字：初期比較で数値が上がった項目 **ピンクのセル**：生徒よりも数値が高い項目 **青のセル**：生徒より数値が低い項目 (生徒 294名 教職員 29名)

＜A校(表4)(図1)＞生徒は、2回目に質問項目③⑥が上昇、⑦が下降、①②④⑤は1回目と同じであった。教職員は、①②④⑤⑥⑦が上昇、③が1回目と同じであった。生徒と教職員では、1回目②③⑥、2回目①②③⑥⑦で教職員の方が、生徒よりも数値が高く、1回目④⑤、2回目⑤で生徒よりも数値が低かった。⑥については、生徒と教

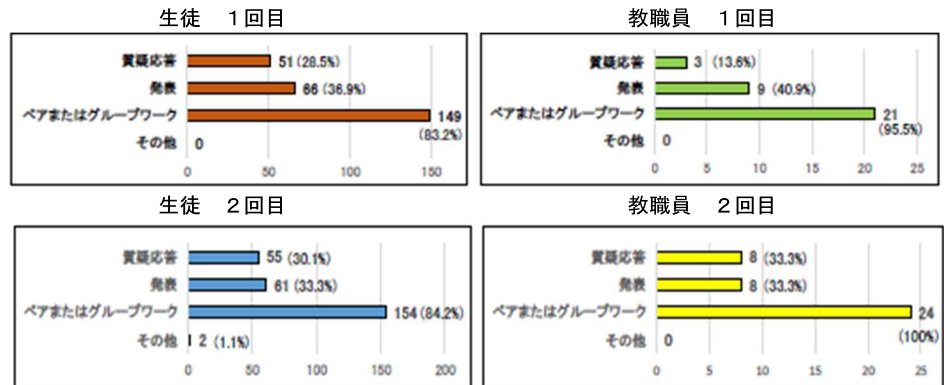


図1 質問⑥に対してどのような場面で感じたか(複数選択可)

高校における短時間で継続的に行う「人間関係づくりプログラム」の効果的な活用に関する調査研究

職員 両者ともに2回目に数値が上昇しており、教職員の方が生徒よりも数値が高かった。付随して行った、どんな場面で感じたか、質疑応答、発表、ペアまたはグループワークから複数選択をする質問に対して、1・2回目、両者ともに、ペアまたはグループワークを選んだ数値が高かった。教職員では、1回目よりも2回目の方が、質疑応答の数値が高くなった。

＜B校(表5)(図2)＞

表5 B校 生徒・教職員意識アンケート比較

質問項目	評価(4段階) ※点数が高いほど肯定的な意識を示している					
	実施初期			実施後期		
	生徒	教職員	差	生徒	教職員	差
① 友だちとの関係づくりにより影響や変化を感じた	3.3	2.7	0.6	3.2	3.0	0.2
② 先生と生徒との関係づくりにより影響や変化を感じた	2.8	2.3	0.5	2.9	2.6	0.3
③ クラス内での生徒の居場所づくりにより影響や変化を感じた	3.1	2.7	0.4	3.0	2.9	0.1
④ 生徒のコミュニケーション能力の向上により影響や変化を感じた	3.1	2.7	0.4	3.1	2.8	0.3
⑤ 生徒のソーシャルスキルの向上により影響や変化を感じた	3.2	2.7	0.5	3.2	2.8	0.4
⑥ 各教科等の授業でよい影響や変化を感じた	2.9	2.5	0.4	2.9	2.6	0.3
⑦ 授業以外の活動でよい影響や変化を感じた	3.1	2.6	0.5	2.9	2.7	0.2

赤字：初期比較で数値が上がった項目 青のセル：生徒より数値が低い項目(生徒152名 教職員20名)

生徒は、2回目に質問項目②が上昇、①③⑦が下降、④⑤が1回目と同じであった。教職員は、2回目に全ての質問項目で上昇した。生徒と教職員では、1回目、2回目ともに、教職員の方が、生徒よりも数値が低かった。②について、生徒と教職員両者ともに2回目に数値が上昇しており、生徒の方が教職員よりも数値が高かった。付随して行ったどのような場面で感じたか、クラスでの活動、学年での活動、学校全体での活動、授業、休み時間、部活動、その他

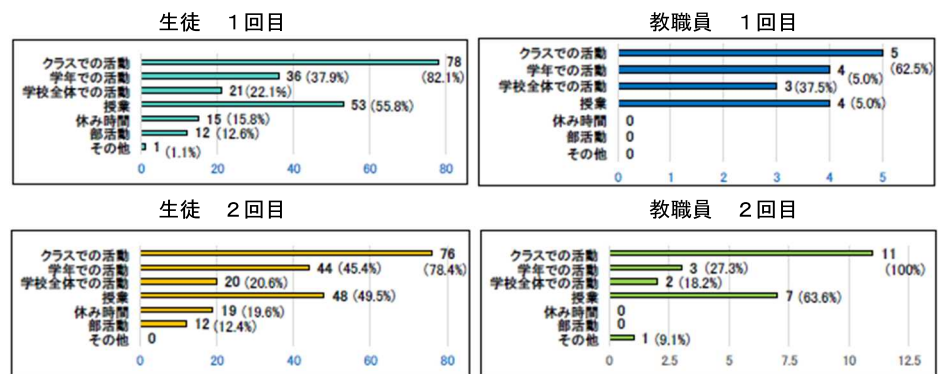


図2 質問②に対してどのような場面で感じたか(複数選択可)

動、学校全体での活動、授業、休み時間、部活から複数選択する質問で、1・2回目、両者ともにクラスでの活動を選んだ数値が高かった。次いで、授業の数値が高かった。

V 考察

1 成果

＜A校＞昨年度と取組内容を変えずに実施したことにより、生徒と教職員が安心して短時間プログラムに取り組むことができていた。また、月行事表で実施日を校内外へ知らせることで、継続的に必ず実施するという意識の高まりを醸成することができていると思われた。安心感を持って、継続的に短時間プログラムを実施することの徹底が、WEBQU から確認できる十分な学級満足度につながったと考えられる。生徒と教職員の意識変化のアンケート比較からは、生徒よりも教職員の意識の高まりを確認することができた。特筆すべきは、短時間プログラムが、各教科等の授業において、生徒のよい変化や影響を与えていると教職員が感じていることであった。これは、短時間プログラムで培った円滑な人間関係、コミュニケーション能力、ソーシャルスキル等の力が生徒に身についた結果、学習場面でも生かされるようになったためと考えられる。短時間プログラムをきっかけに、教職員の生徒の人間関係をつくる力の育成に向けた意識が高まった結果だと思われる。また、ペアまたはグループ

大分県教育センター教育相談部

ワークが生徒、教職員ともに高い数値を示していることから、対話的で深い学びを達成するための基礎的な学習態度を育てる上でも短時間プログラムは有効だったと考えられる。

〈B校〉実施内容や時間帯等、生徒の実態に合わせて試行錯誤しながら取り組んでいた。行事等との日程調整から月1～2回の実施となったが、実施日を変えても継続して短時間プログラムを行ったことは、生徒だけでなく、教職員にも継続する大切さが意識化されてきたのだと思われる。hyper・QUの親和型の学級や学級満足群の好転率の増加等から、生徒が学校に安心感を持てるようになってきていると思われ、今後さらに安心感のある居場所づくりを構築するために短時間プログラムを活用していくことが大切だと考える。生徒と教職員の意識変化のアンケート比較からは、生徒の方が教職員よりも短時間プログラムの良い変化や影響を感じていることがわかった。ただし、教職員も2回目の数値が全ての項目で上昇していることから、生徒の良い変化や影響を短時間プログラムの実施から感じていることが確認できた。また、短時間プログラムが先生と生徒との関係づくりに良い変化や影響を与えていると生徒自身が感じていることや、教職員も2回目の数値が上昇していることから、生徒同士の関係だけでなく、教職員との関係性も醸成できることがわかった。これは、信頼できる教職員が存在することで、安心感が生まれ、自信を持って、自分の思いや考えを言語化できるようになることにつながっていくと考えられる。

〈両校共通〉生徒と教職員の意識変化のアンケートから、生徒の1回目と2回目では、平均値が3.0前後の高い評価での維持が多かった。これは、短時間プログラムを継続しても、安定的に高評価が維持されていると解釈できる。これまで、短時間プログラムを繰り返すとマンネリ化や飽きが生まれるのではないかという懸念があったが、生徒は一貫して好意的に短時間プログラムを受け止めて取り組んでいたと考えられる。今後も生徒が安心して取り組める短時間プログラムを継続し続けることで、更なる生徒たちの飛躍につながっていくと思われる。

2 課題

2校の実践から、高校において、短時間プログラムを組織的・継続的に取り組むことが、生徒の幅広い人間関係をつくる力や対話的で深い学びを達成するための基礎的な学習態度等を育成することに有効であることがわかった。しかし、それを高校で維持していくためには、以下の留意点が必要であることが考えられた。

教職員の意識向上

教職員が、短時間プログラムを生徒が、自分の思いや考えを無理なく、安心感を持って、言語化する練習ができる学習場面と捉えて、意識して取り組むことで、短時間プログラムの有用性を学校全体で感じていけるようにしていくことが必要である。

生徒が安心して、継続的に取り組めるための実施計画

隔週で実施日の固定や、実施できなかった場合は日を改めること等、できる範囲で継続することが重要だと思われる。また、実施内容についても、3～4種類のエクササイズに固定し、学期毎にローテーションを組んですることが教職員の負担軽減につながるだろう。さらに、同じ事を繰り返し実施することが、人間関係づくりが苦手な生徒の安心感にもなると思われる。これらの工夫を行うことで、全ての教職員や生徒が継続的に取り組めるプログラムになっていくと思われる。

次年度は、2点の留意点を念頭におき、協力校での短時間プログラムの実践に生かし、今まで以上に、魅力ある学校づくり、いじめ・不登校の未然防止等を期待して、高校での短時間プログラムの広がりを進めていきたい。

高校における短時間で継続的に行う「人間関係づくりプログラム」の効果的な活用に関する調査研究

(注 QU 学級集団タイプ)

【親和型】 親和的なまとまりのある学級集団。学級にルールが確立し、親和的な関係が成立していると想定される。子どもたちが自主的に活動し、学級全体に活気が見られる状態。

【かたさ型】 かたさの見られる学級集団。一見落ち着いて見える反面、子どもたちの意欲に大きく差が見られ、人間関係が希薄となることが想定される状態。

【ゆるみ型】 ゆるみが見られる学級集団。一見のびのびとしている様に見える反面、学級のルールが低下していることが想定される状態。

【不安定型】 不安定な要素をもった学級集団。学級内でルールの定着が低く、人間関係も希薄な状態。

【拡散型】 拡散した学級集団。学級としての方向性を見いだすことが難しい。自分勝手な行動が見られ、人間関係が希薄な状態。

【不満足型】 教育環境の低下した学級集団。学級や学校に不満を感じている子どもたちがとても多い状態。(調査研究対象校該当学級無し。)

VI 参考引用文献等

- ・令和3年度児童生徒の問題行動・不登校等生徒指導上の諸課題に関する調査(2022 文部科学省)
- ・大分県版「人間関係づくりプログラム」小・中・高校編(2016・2017 大分県教育センター教育相談部)
- ・Q-U hyper・QU コンピュータ診断資料の見方・生かし方高校用(2020 図書文化)

大分県教育センター教育相談部

別添資料 1

A校 R4年度短時間で継続的に行う「人間関係づくりプログラム」実施内容

実施日		エクササイズ等活動内容	めあて	構成人員	
1 学 期	4 月	15	生徒向け オリエンテーション	「スマイルタイム」の目的、具体的な 取組内容について知る。	学年集会及び HRA 等で紹介
		26	<u>アドジャン</u>	「スマイルタイム」の流れを知る。 クラスの友だちのことを知る。	ペアワーク
	5 月	24	<u>二者択一</u>	クラスの友だちのことを知る。 自分のことを知る。	グループワーク
	6 月	14	<u>1分間スピーチ</u> (1週間のエピソード)	クラスの友だちのことを知る。 自分のことを相手に伝える。	ペアワーク
	7 月	12	<u>いいとこ四面鏡</u>	友だちの良いところを見つける。 自分の良いところに気づく。	4～5人 グループワーク
		19	校内アンケート WEBQU 実施	1学期の活動をふりかえる。 自分のことを知る。	個人 (全学年) 個人 (1・2学年)
2 学 期	8 月	24	<u>アドジャン</u>	自分のことを相手に伝える。 相手の考えを受け入れる。	ペアワーク or 3～4人 グループワーク
	10 月	18	<u>二者択一</u>	自分のことを相手に伝える。 相手の考えを受け入れる。	ペアワーク or 3～4人 グループワーク
	11 月	8	<u>1分間スピーチ</u> (1週間のエピソード)	話を簡潔にまとめて相手に伝える。 相手の考えを受け入れる。	ペアワーク (3学年最終活動日)
		15	WEBQU 実施 校内アンケート	自分のことを知る。 2学期の活動をふりかえる。	個人 (1・2学年) 個人 (3学年)
	12 月	6	<u>いいとこ四面鏡</u>	友だちの良いところを見つける。 自分の良いところに気づく。	4～5人 グループワーク
		20	校内アンケート	2学期の活動をふりかえる。	個人 (1・2学年)
3 学 期	1 月	17	<u>二者択一</u>	自分のことを相手に伝える。 相手の考えを受け入れる。	3～4人 グループワーク
	2 月	7	<u>1分間スピーチ</u> (1週間のエピソード)	話を簡潔にまとめて相手に伝える。 相手の考えを受け入れる。	ペアワーク
	3 月	14	<u>いいとこ四面鏡</u>	自分や友だちの良いところに気づく。 友だちからの評価を受け入れる。	4～5人 グループワーク
		22	校内アンケート	1年間の活動をふりかえる	個人 (1・2学年)

※昨年度開始時点から、短時間プログラムを学校独自の名称「スマイルタイム」としている。

※クラス主体で実施した。

※エクササイズの種類は固定、実施時期やエクササイズのテーマ等は検討し、設定した。

高校における短時間で継続的に行う「人間関係づくりプログラム」の効果的な活用に関する調査研究

別添資料 2

B校 R4年度短時間で継続的に行う「人間関係づくりプログラム」実施内容

実施日		エクササイズ等活動内容	めあて	構成人員	
1 学 期	5 月	10	<u>アドジャン</u>	聴く姿勢の確認(うなずく、笑顔、相手に視線を向ける)をし、相手の話を最後までしっかりと聴く。	ペアワーク
		13	hyper・QU 実施	自分の実情を知り、今後の学校生活に生かす。	個人 (全学年)
		24	<u>アドジャン</u>	聴く姿勢の確認(うなずく、笑顔、相手に視線を向ける)をし、相手の話を最後までしっかりと聴く。 相手の話を聴き、受け入れると同時に自分の考えも相手に伝える。	ペアワーク
	31				
	6 月	21			
		7 月	12	校内アンケート	1学期の活動をふりかえる。
2 学 期	9 月	7	<u>アドジャン</u>	相手の話を聴き、受け入れると同時に自分の考えも相手に伝える。	3～4人 グループワーク ※2学期から、 1・2学年の みで実施
	10 月	24 (1学年)	<u>二者択一</u>	相手の考えを受入れると同時に、自分の考えもしっかりと相手に伝える。	
		26 (2学年)			
	11 月	14 (1学年)			
		16 (2学年)			
	12 月	18			hyper・QU 実施
12 月	7	<u>いいところ三面鏡</u>	自分の長所について知り、自己の個性の伸長につなげる。		
3 学 期	1 月	25	<u>質問ジャンケン</u>	相互の考えを聴くことで、自分を客観的に捉えることができる。	3～4人 グループワーク
	2 月	8	<u>ジョハリの窓で せーのドン!</u>	「他から見えている自分」を知り、「自分の気づいていない一面」や「思わぬ長所」を発見する。「自分しか知らない自分」を開示していくことで、自己を開放し、打ち解けた人間関係を築いていく助けとする。	
		20	<u>いいところ三面鏡</u>	自分の長所について知り、自己の個性の伸長につなげる。	
	3 月	15	校内アンケート	1年間の活動をふりかえる。	個人 (1・2学年)

※クラス主体で実施した。

※エクササイズのテーマ等はその都度検討し、設定した。